

“小心”に見られる原因賓語生成の一類型

—— “小心”の語史 ——

伊 原 大 策

1.1 “小心”と原因賓語

漢語における動詞と賓語との関係は多様であり、単純な「シテとウケテ」の関係に納まらないことはよく知られている。中でも動作とその原因を示す原因賓語は、造語法研究の観点で注目すべき例として、しばしば話題に登る。“小心”はその典型的な例の一つであり、次のように説明される。

1, 小心路滑。(滑らないように注意せよ) → 因為路滑, 所以要小心。(道が滑る〔と困る〕ので注意せよ)⁽¹⁾

“小心”と“路滑”とによって構成される関係は“因為～所以…”に置き換えることができる。だから“路滑”は“小心”の原因賓語だと認定するわけである。

ところが、一方で“小心輕放”という表現が存在し、この句を「静かに置かないように注意せよ → 静かに置く〔と困る〕ので注意せよ」と理解することはあり得ない。言うまでもなくこれは「取扱注意」という意味に解される。このように、“小心路滑”と“小心輕放”は見かけの構造が同一であるにもかかわらず、“小心”とその後置成分とが構成する論理関係について見れば、両句はあたかも反対の関係を示すかのようである。これは、“小心”の文法機能を考える際、矛盾に満ちた現象と言わねばならない。

しかし、もし“小心”の文法性を論じようというのであれば、なぜ“小心”が賓語を伴うことが可能かという点が、先に問題にされなくてはならない。“小心”の語構造が偏正構造（「修飾＋被修飾」構造〔小さな心〕）であるにせよ、動賓構造（「動詞＋目的語」構造〔心を小さくする〕）であるにせよ⁽²⁾、この語が賓語を従えるにふさわしくない語であることは、明らかだからである。

“小心”が賓語を伴うのは、どのような過程を経ていつ頃に始まるのであろうか。またその過程と原因賓語の発生とは、如何なる関係を持つのであろうか。そして“小心路滑”の“小心”と、“小心輕放”の“小心”は歴史的にどのような連続性を備えるのであろうか。

小論は、“小心”が賓語を従えるに至る過程を、語法史研究の観点から追跡することにより、原因賓語生成の一類型を明らかにすることを試みる。

2.1 明代白話の「小心+Vp」

“小心”は古くから白話作品で使用される語であり、主に「心配りを細かくする」「注意する」の意味で用いられる。この語はもちろん単独での使用が可能だが、その前後に形容詞性の語（あるいは静態性の動詞）を従えると、それらと並立関係を構成するかのように用いられる。例えば、

2, 你可小心仔細, 不可有誤。(『清平山堂話本』「五戒禪師私紅蓮記」)(おまえはよくよく注意深く慎重でなくてはならず、そそうがあってはならない)

3, 這小二在家里小心謹慎, 燒香掃地件件当心。(『雨窓集』「錯認屍」)(小二は家では注意深く慎み深く、香を焚いたり掃除をしたりということもすべて慎重であった)

4, 又怕令公在這場差使內尋他罪罰, 到底有些疑慮, 十分小心勤謹, 早夜督工, 不辭辛苦。(『古今小説』6)(葛令公がこの公務を利用して彼を処罰しようとしているのではないかと恐れ、最後までその疑念があるために、彼は十分に注意深く慎重で、朝から夜まで仕事をして苦勞を厭わなかった)

このように「慎重」「慎み深い」などの意を示す語が、しばしば“小心”と並んで用いられる。これらの語と“小心”が並立の関係にあるとするなら、“小心”は形容詞として機能しているということになる。

一方、動態性の語(動詞)を後ろに従えることも珍しくない。この例も、比較的古い白話を反映していると考えられる作品から明代後期に成立した作品にまで、広くその例を求めることができる。

5, 你可小心伏侍, 不可托大。(『雨窓集』「錯認屍」)(あなたはよくよく注意してお仕えるように。傲慢になってはいけません)

6, 温殿直出府到使臣房里看那和尚酒還未醒, 分付衆做公的小心看守。(二十回本『平妖伝』12)(温殿直は役所を出て執務控室へ来てその和尚がまだ酔いから醒めていないのを見ると、役人たちに命じて注意して〔その和尚を〕見張らせた)

7, 元帥伝令四營四哨, 各各小心巡警, 毋致疏虞取罪。(『三宝太監西洋記』72)(元帥は命令をあちこちの部隊に出して、それぞれ注意して警邏し、油断して罪を得ることのないようにさせた)

8, 那李瓶兒擱着淚道：“路上小心保重。”(『金瓶梅』55)(李瓶兒は涙を浮かべながら「道中は注意して体を大切に下さって下さい」)

9. 卿雖忠盡可嘉，須要小心用事。(『封神演義』95) (忠義の志はご立派ですが、注意して事にあたらずにはなりません)

明代の白話作品から「小心+Vp (動詞句)」を探し出すことは極めて容易である。これらの例から読みとることができるのは、いずれも「注意して～する」という意を示すものとして、“小心”が動詞句と結び付く特徴を持つという点である。この事実は、大いに注目されてよい。現代漢語の「小心+Vp」は、「～しないように注意する」という意を示す機能を持つが、そうした「小心+Vp」は、明代白話には存在しない。現代漢語で常用される用法は、語法史的には相当に新しいものと考えらるべきである。

2.2 明代白話の「小心+N」

明代白話には「小心+Vp」の他に、「小心+N (名詞)」句型も存在する。例えば、

10. 只得分付群妖，各要小心火燭，謹防盜賊。(『西遊記』71) (やむを得ず子分の妖怪どもに、それぞれ火の元に注意し、盗賊を防ぐように言いつけた)

11. 小的們，緊閉門戶，小心火燭。(『西遊記』92) (ものども、戸締まりをきちんとし、火の元に注意しろ)

12. 只是早晚緊防門戶，小心火燭。(『石點頭』3) (ただ朝晩には戸締まりをきちんとし、火の元に注意するように)

13. 一走進房來，教兩個丫鬢先睡，須要小心火燭。(『石點頭』12) (部屋に入るや、二人の下女に先に寝させ、火の元に注意するように言いつけた)

14. 拿完了，分付拴好門戶，小心火燭。(『欲喜冤家』9) ([荷物を] 運んだら、戸閉まりをし、火の元に注意するように言いつけて下さい)

これらの例では、“小心”の後ろに“火燭”という名詞が位置し、「火の元に用心せよ」という意味が示されている。このように、両者の間には連帯成分としての文法上の支配関係の存在を認めることができるため、あたかも“小心”とその後置成分の名詞とが動賓式を構成しているかのようである。

ところが明代白話作品からは、名詞に“火燭”以外を用いた例を見出すことが容易でない。明代の白話においては、「小心+N」のNとして、常に“火燭”が採用される。つまり、「小心+N」は“小心火燭”のパターンでのみ存在する。そのため、“小心火燭”は「火の用心」という、おそらくは標語として常用された特殊な表現であったと考えられる。この推測は、明代白話の“火燭”が、しばしば「戸締まり用心」という表現(例文10“謹防盜賊”、例文

11 “緊閉門戸”、例文12 “緊防門戸”、例文14 “拴好門戸”）と共に使用される事実によっても支持される。

したがって、明代白話の「小心+N」は、現代漢語の「小心+N」と異なり、これを動賓式であると認定することにはためらいを感じさせるものである。名詞性賓語を自由に従える現代漢語の“小心”は、明代にはなお発生していないのである。

2.3 清代白話の「小心+Vp」

明代白話の「小心+Vp」に認められた用法は、清代に入ってもなお引き続いて用いられる。

15, 你当小心管待, 不可怠慢。(『醒世姻縁伝』93) (おまえは注意して世話をするように。おろそかにしてはいけない)

16, 是你们的新主人, 须要小心伺候。(『儒林外史』6) (おまえらの新しい主人なのだから、注意してお仕えしなくてはならない)

17, 即刻就伝給園里各处的媽媽們小心訪查。(『紅樓夢』52) (直ちに園内各所の婆やたちに伝えて注意して探させた)

これらの「小心+Vp」は、いずれも「注意して～する」という意を示す用法である。つまり、明代白話の“小心”をそのまま受け継ぐ「小心+Vp」である。清代の前半までは「小心+Vp」の用法になお変化は認められない。

ところが、清代も末に近づいた頃に成立した『兒女英雄伝』には、これまでの例と異なる用法が出現する。

18, 公子, 你不能, 小心看燙了手。(『兒女英雄伝』9) (若様、いけません、やけどしないように注意して下さい)

この“小心”とそれに後置する成分は、どのような文法関係を構成しているのであろうか。“小心! 看! 燙了手”(注意して! ほら! やけどするよ)と読むことができるし、“小心+ [看+ [燙了手]]”(手がやけどすることを、注意して見よ)と受け取ることもできそうである。あるいは“看”が単に感動詞として挿入されただけと解釈するなら、“小心 [看] 燙了手”(やけどしないように注意せよ)と理解できることにもなる。これは翻訳技術の問題ではなく、“小心”とそれに後置する成分との文法関係の問題である。

この文法関係を如何に解するにせよ、こうした例がここに現われるのは、決して偶然でない。というのは、これまでの白話に知られていなかった“小心”の用法が、この作品に複数出現するからである。

19, 你老躲遠着瞧, 小心碰着。(『兒女英雄傳』4) (あなたは離れて見ていて下さい。ぶつからないように注意して下さい)

20, 可小心他們温毛了我的酒。(『兒女英雄傳』15) (彼らが私の酒を熱くしすぎないように注意して下さい)

21, 這一個褥子薄, 再墊個坐褥罷。小心地下的涼氣冰着。(『兒女英雄傳』20) (この座布団は薄すぎるので、あと一枚敷きましょう。地面の冷気で体が冷えないように注意して下さい)

22, 論不定我要叫你当着兩個媳婦背的。小心當場出丑。(『兒女英雄傳』33) (ひょっとして二人の嫁の前で〔本の内容を〕暗唱させるかもしれないぞ。その場になって恥をかかないように注意なさい)

これらの「小心+Vp」を、従来の用例と同じ機能を持つものとして扱うことはできない。例文19を従来の用法に基づき理解しようとする、「注意してぶつかりなさい」という意味になってしまう。例文22も同様に、「注意してその場になって恥をかきなさい」と理解しなければならない。ところが言うまでもなく、これらはそれぞれ、「ぶつからないように注意なさい=ぶつかる〔と困る〕ので注意なさい」「その場になって恥をかかないように注意なさい=その場になって恥をかく〔と困る〕ので注意なさい」と読むべきものである。これはとりもなおさず原因賓語に他ならない。遅くとも清末までに、「小心」の文法性に大きな変化が生じていたことは疑いない。

2.4 清代白話の「小心+N」

清代には、「小心+N」も変化を生じ始めていた。例えば、清代中期に成立した『岐路灯』には次の例が見い出せる⁽³⁾。

23, 兪総兵聞報, 発来“小心火燭, 如違重究”告条。(『岐路灯』102) (兪隊長は知らせを受けて「火の元に注意せよ。違反すれば重罰に処す」というお触れを出した)

24, 天晚了, 你們各人都睡去。樊家女人与我收拾床, 也走罷。小心廚房的火。(『岐路灯』90) (時間が遅くなったのであなた方はそれぞれ行って寝なさい。樊家の女の人には私に寝台の整理をして行って下さい。台所の火の元には注意して下さい)

25, 還吩咐厨役道: “小心門戶。”(『岐路灯』43) (さらに台所の小者に命じて「戸締まりに注意せよ」)

26, 你上樓把花門開了, 伸頭望下看着, 小心東西。(『岐路灯』46) (あなたは二階に上がって飾り窓を開けて下を見ながら、〔盗まれないよう〕物に注意して下さい)

い)

ここには、明代白話に見られた“小心火燭”とその変形の用法が認められる。すなわち、例文23は伝統的な“小心火燭”そのものであり、例文24の“小心厨房的火”はその“火燭”に修飾語を加えたものである。また例文25の“小心門戸”は、“緊閉門戸，小心火燭”（例文11『西遊記』92）、“緊防門戸，小心火燭”（例文12『石點頭』3）、“拴好門戸，小心火燭”（例文14『歡喜冤家』9）などの対句内部の前後の要素が、動賓構造の形式を借りて縮約されたものである。こうした“小心火燭”の亜型が存在する事実は、“小心”と“火燭”との結びつきの自由度が高まってきていることを推測させる。

この作品では、同時に“小心東西”（例文26）という例も確認できる。調査の及んだ範囲に基づけば、これは“火燭”（及びそれとセットで用いられる“門戸”）以外が“小心”の後置成分として伴われる最も早い例である。すなわち、この例は、“小心”が“火燭”以外の名詞を自由に従えるようになるべく歩み出した第一歩を示すものと見ることができ。名詞を賓語として従える現代漢語の“小心”の最初期の姿をここに確認することができよう。これは、『儿女英雄伝』の「小心+Vp」が新しい動きを示した事実（第2.3章）と関連する現象であると解してよい。“小心”は清代中期には、賓語に関して既に際だった変化を生じ始めていたと言える。清代中期から清末・民国初期にかけては、“担心”や“関心”など、これまで賓語（または賓語相当語）をとることのなかった動詞が賓語を求めて新しい動きを見せた時期に相当する⁴⁾。

3.1 現代漢語の「小心+Vp」と明代白話の「小心+Vp」

ところで、現代漢語における“小心”とその後置成分との文法関係を確認すると、

27, 天气冷了, 小心着凉。(大修館書店『中日大辞典 増訂版』) (寒くなった、風邪をひかないように注意しなさい)

“小心”と“着涼”との間には特定の文法関係が存在し、その関係は動詞とそれに後置する成分との支配関係であるので、ここに動賓式が成立していると思えることができる。つまり“着涼”を“小心”の賓語と認定してよい。

一方、清代前半以前の白話を観察すると、事情は同じでない。2.1章であげた例を再び用いると、

5, 你可小心伏侍…。(『雨窓集』「錯認屍」) (あなたはよくよく注意してお仕えるように)

6, …分付衆做公的小心看守。(二十回本『平妖伝』12)(役人たちに命じて注意して〔その和尚を〕見張らせた)

例文5の「小心+Vp」は、「注意してお仕えせよ」という意を示すものである。“小心”を形容詞として扱うなら、“小心”と“伏侍”は、修飾語と被修飾語との関係を持つ。したがって明代の「小心+Vp」は偏正式ということになる。

しかし、“小心”の動作性に注目してこれを動詞として扱うなら、“小心”とVpは、同一文内に存在する第一動詞と第二動詞との関係を持つことになる。というのは、“小心”に後置するVpは、“小心”によって示される行為の連帯成分として“小心”に関与しているのではなく、“小心”という動作の後に行なわれるもう一つの動作が並立して表現されたものに過ぎないからである。そのため、この場合、明代白話の「小心+Vp」は連動式であるということになる。

例文6も同様に理解すべきであり、「注意して見張らせた」であって、「見張ることに注意させた」ではない。そのため、これを動賓式と認めることは適切でない。この見解は、“小心”と同様の語構造を持つ“担心”“関心”などが清代中期以前において、いわゆる賓語なるものを従えることはないという事実によっても支持される⁽⁵⁾。

また、たとえ明代白話の「小心+Vp」を動賓式であると認めても、少なくとも現代漢語の“小心”の用法とは大きく異なる点に注意が向けられなければならない。例文27の“小心着涼”と例文6の“小心看守”は、“小心”とVpとの関係が論理的に逆だからである。すなわち、後者が前者と同じ構造を持つものとして理解すると、前者は「風邪をひかないように注意せよ」であるのに対して、後者は「見張らないように注意せよ」という意味になり、表現すべき内容が逆になる。現代漢語にあっては、“小心”の賓語は、「マイナスの事態の発生を恐れるので、それが実現しないように注意する」という意を示す機能を持つ。“小心”の賓語が原因賓語であると言われるのはこのためである。

現代漢語の「小心+Vp」と明代白話の「小心+Vp」は、見かけ上は共に動詞句を後置させているが、その文法構造はかくも大きく異なるのである。

3.2 現代漢語の「小心+N」と明代白話の「小心+N」

では「小心+N」の構造はどうであろうか。現代漢語の例を先に見ると、
28, 小心火車。(光生館『現代中国語辞典』)(汽車に注意せよ)

動詞“小心”と名詞“火車”との間には連帯成分としての特定の文法関係が存在し、“火車”は“小心”という行為の対象に關与するものとして機能している。またその名詞は“火車”以外にも自由に選ぶことができる。したがって例文28の“火車”は賓語であると見なしてよい。

では、明代白話においても、“小心”とそれに続く成分との間に、同じような文法関係が成立しているのであろうか。例文11を再び引用すると、

11, 小的們, 緊閉門戸, 小心火燭。(『西遊記』92) (ものども、戸締まりをきちんとし、火の元に注意しろ)

この例における“小心火燭”は見かけ上、“小心”という動詞が“火燭”という名詞を賓語として支配しているかのようである。ところが既に述べたように、「小心」に後置される名詞として“火燭”以外を用いた例を、明代以前の白話作品から探し出すことはできない。「小心+N」において、名詞成分として採用されるのは“火燭”に限られる。しかも“小心火燭”はしばしば戸締まりを訴える語(“緊閉門戸”など)と対句を構成しながら用いられる(例文11、12、14)。そのため、この句型の成立を可能にしている力は、“小心”自体の文法性ではなく、その対句を構成している“緊閉門戸”(またはその類似形としての例文12“緊防門戸”、例文14“拴好門戸”など)の文法性であると見なければならぬ。すなわち、“緊閉門戸”が動賓式を構成しているからこそ、それと対を成す“小心”も動詞の後置成分(見かけ上の賓語)を従えることに成功していると考えられるのである。

したがって、“小心火燭”は、“緊閉門戸”との対句関係の上で成立した特殊な慣用句型と見なすべきである。明代の白話において“小心”が種々の名詞を後ろに従えるという事実が普遍的であったと見ることは正しくない。当時の“小心”は名詞性の賓語を自由に従えることはできなかったのである。これでは、“火燭”が現代漢語で言うところの賓語なるものと同一の文法機能を担っているとは認めがたい。「小心+N」も「小心+Vp」と同様に、明代白話のそれと現代漢語のそれとは大きく異なるのである。

4.1 原因賓語の生成過程

“小心”に後置される名詞成分(賓語相当語)について見た場合、明代のそれが“火燭”のみであり、清代中期のそれが“厨房的火”“門戸”“東西”である事実は興味深い。ここには、賓語相当語の間に存在する類推関係を認めることができるからである。

漢語において、とりわけ動賓構造動詞が類似の意味・構造を持つ場合は互いに類推を呼び、影響し合う結果、新用法を生み出す事実が確認できる。例えば“洗浴”の明代中期における動賓構造化⁽⁶⁾、及び“帮忙”の民国期以降における非動賓構造化⁽⁷⁾などがその例の一つである。であるからには、“小心”がその後置成分の名詞の範囲を拡大させながら、ついに自由に賓語を従えるに至った過程にも、類推が強く機能していると考えerことは十分に合理的であろう。

そこで、明代の“小心火燭”が「戸締まり用心、火の用心」という標語の中で使用された事実と、清代において“小心”が“厨房的火”“門戸”“東西”を後置成分として伴ったという事実、及び現代漢語の“小心”が名詞を自由に賓語として採用できるという事実とを考え合わせると、“小心”が如何なる過程を経て賓語を従えるに至ったかを、推測することが可能となる。これらの要素は時間軸上で一条の直線によって結びつけられ、そこに変遷過程が自ずと浮かび上がる。すなわち、

[明代]

“小心火燭”…“小心”の後置成分として“火燭”のみが許される。

これは慣用句（標語「火の用心」）にふさわしい縮約によって成立した形態だが、“緊閉門戸，小心火燭”の対句の一方の成分として常用されるため、“緊閉門戸”が内包する動賓構造の影響を受け、“火燭”は見かけ上の賓語に変質する可能性を秘める。

“小心”は賓語を伴うことができない

[清代中期]

“小心厨房的火”
“小心門戸” } …“小心”の後置成分として“火”や“門戸”が選ばれる。

“緊閉門戸”との交錯とそれに基づく類推により、“小心火燭”に動賓構造が適用され、“小心厨房的火”や“小心門戸”が成立する。しかし、“緊閉門戸，小心火燭”という慣用句（「戸締まり用心、火の用心」）の連想の範囲内にとどまるため、賓語相当語が選択される際、自由度が低く、当初はNとして“火”や“門戸”が選ばれる。

“小心”が名詞性賓語を伴う萌芽的形態の誕生

“小心東西”…“火”“門戸”以外の名詞が動詞の後置成分として使用される。

“小心厨房の火”や“小心門戸”を經由して“小心”の後置成分に自由度が高まり、“小心東西”が生成される。

清代中期以降は自動詞が他動詞化を求め始める時代であったことも、この用法の発生を促した。

名詞を賓語とする原因賓語の誕生

[清代後期または清代末期]

“小心+Vp”…“小心+N”の変質に引きずられ、“小心”がVpを賓語として従えるようになる。

動詞句を賓語とする原因賓語の誕生

5.1 終わりに

“小心”が賓語を伴うことができるようになったため、「小心+Vp」は清代末期頃以降に、伝統的な用法（連動式または偏正式：「注意して～する」）と新しく発生した用法（動賓式：「～しないように注意する」）との相反する二つの用法が混在することとなった。これは言語の伝達機能という点から見ればマイナスだが、言語が継承される上での連続性という点では有効に機能したと考えられる。というのは、本来は旧用法の第二動詞（偏正式として扱うなら、被修飾語）であったVpを文賓語に見立てるという操作が可能となり、外見上の句型上の変更を一切行わずに、新用法の実現に成功するからである。こうして“小心”は、旧用法と新用法との見かけの整合性を確保しつつ、新用法をスムーズに次の世代へと伝えた。

しかし、同じ句型が反対の意味を表現する場合があるのでは、いかにも具合が悪い。そこでまもなく、“覚新小心地揺着槩”（巴金『家』19）（覚新は注意深く權を漕いで…）や“他小心地撫着那重甸甸下垂的稻穗”（茅盾『秋収』3）（彼はその重く稔ってずっしりと垂れ下がった稻穂を注意深く撫でると…）の如く、“小心”が修飾語として使用される際には接辞の“地”を付加する工夫も行なわれるようになった。この結果、“小心”は伝統的用法と新興用法とを形態的に区別することが可能となった。

しかし、現在でも文言性を残す表現においては、“地”を伴うことなく修飾構造を構成することも少なくない。例えば“小心輕放”がその例である。同じく現代漢語という環境にありながら、“小心着涼”が「風邪をひかないように

注意せよ」であるにもかかわらず、“小心軽放”が「静かに置かないように注意せよ」を意味しないのは、文脈による圧力によって決められるのではなく、“小心”が賓語を伴うことが可能になった瞬間に決定されていたことなのである。この両者の差異は、旧用法と新用法との間の語法機能の違いに他ならない。

以上に見たように、“小心”が賓語を従える原型は、明代でしばしば用いられた慣用句“小心火燭”（火の用心）に求めることができる。この句は、「悪い事態を発生せしむ可能性のある火の元が、危険な状態にならないように注意する」という意味で使用された。そのため、“小心”が、賓語を従える他動詞としての用法を獲得した後も、悪い事態を発生せしむ原因となる語を賓語として採用することが求められる。“小心”が原因賓語を伴う機能は、こうした背景のもとで成立したと考えられる。

注

- 1) この例文は孟慶海1987、p.21に基づく。
- 2) “小心”は歴史の古い語であり、上古漢語に既に存在する。李佐豊1983が指摘するように、現代漢語では使動性の乏しい自動詞でさえも、上古漢語においては賓語を従え、使動性・他動性を発揮する例が少なくない。“小”も例外ではなく、“匠人斲而小之”（大工がそれ〔大木〕を切つて小さくする）（『孟子』「梁惠王下」）の如く、他動詞として用いられることがある。したがって“小心”の語構造について、それが動賓構造である可能性を排除できない。しかしこの語が偏正構造であれ、動賓構造であれ、小論の論旨には影響を与えないので、この問題には拘らない。
- 3) 『岐路灯』のテキストは相当に複雑であり、主要なテキストのすべてを容易に見ることができるわけではない。しかし小論が利用した部分は、上海図書館蔵清鈔本と樂星1980校本が一致しており、本文の信頼性は高い。なお、回数は清鈔本に基いた。
- 4) “担心”が賓語を従えるようになった過程については、拙論1999a及び拙論1999bで触れられている。“関心”他については別稿が準備されている。
- 5) 同上拙論参照。
- 6) 拙論1998a
- 7) 拙論1998b

参考文献

- 伊原大策1998a 「“洗澡”考」『中国語学』245
伊原大策1998b 「“帮忙你”は誤りか」『言語文化論集』48

- 伊原大策1999a 「“担心”が賓語をとるに至るまで」『筑波大学東西言語文化の類型論』
特別プロジェクト研究報告書平成10年度』PARTII
- 伊原大策1999b 「二つの“耽心”」『東北大学中国語学文学論集』4
- 孟慶海1987 「原因賓語和目的賓語」『語文研究』1987-1
- 李佐豊1983 「先秦漢語的自動詞及其使動用法」『語言学論叢』10
- 樂星1980 『岐路灯』 中州書画社
- 上海図書館蔵清鈔本影印 『岐路灯』『古本小説集成』所収 上海古籍出版社1990
(筑波大学)